

Lecture series

<第21回>

フィールドでの出会いが研究 テーマになる：ゴカイと暦の 人類生態学を例に

2019年6月17日（月） 15：00～16：15

京都大学附属図書館 1階 ラーニング・コモンズ

＊申込不要＊



Learning Commons

問合せ先：京都大学附属図書館 利用支援掛

TEL：075-753-2636

e-mail：ref660@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp



古澤 拓郎 氏

（京都大学アジア・アフリカ
地域研究研究科 准教授）

今回のテーマ

理系文系に関係なく、多くの研究者はまず先に研究テーマがあって、そのテーマにあったフィールドに出かけて行って、調査・研究を行います。しかし、私の場合はまずフィールドにいて、そこで出会ったさまざまな出来事をじっくり考えることで、はじめて研究テーマを立ててきました。目的と手段が逆になっているのです。

今回発表する研究は、私がインドネシアのスンバ島というとても美しいところを訪れた時に、「ゴカイはとても神聖な生き物で、おいしい食べ物である」という話を聞いたことに端を発します。「そんなおいしいものなら、ぜひ食べてみたい」と思ったのですが、ゴカイはごく限られた場所でしか食べられていない種類のもので、そして一年間のごく限られた時期にしか発生することがなく、しかもその発生時期というのは現代の暦や生物学では予測することができないものなのでした。そこで私は伝統的な暦の研究者や、ゴカイを専門とする生物学者、スンバ島のたくさんの人々を尋ねてまわり、ゴカイを食べられる場所と時期を特定していきました。自分の研究室では関連する分野の文献を集め、気象や人工衛星画像などの科学的データを集め、その日・その場所へと迫ったのでした。日本でのゴカイは、少し気味の悪い生き物で魚釣りの餌だとしか思われませんが、実はゴカイを食料とする社会はスンバ島以外にも南太平洋の各地やベトナムなどにも見られます。みなさんが常識だと思っていることが、実は常識ではないということを知る、フィールドワークの醍醐味についても知ってもらいたいと思います。



古澤拓郎 氏 自己紹介

高校生のころに「熱帯でフィールドワークをしたい」という思いに駆られるようになり、その後大学院で存分にフィールドワークしたあとも、行動のモチベーションはこの思いが大半であって、そのまま、いまに至る。専門は東南アジア地域研究、人類生態学、国際保健学。